

41 日本消化器病学会発足の頃

大村 敏 郎

ここ数年の間には一〇〇年とか一〇〇回とか言う医学会の節目が沢山あり、それぞれの学会員が歴史を振り返る機会を持つことになる。これには我々日本医史学会の会員が関与することが多くなるであろうと思われる。

医史学会員も自分の学会のただけに留まらず、広く周りの学会（各自の所属する学会や地区医師会）に発表したり、その学会史の編纂に協力したりして、医史学の意義と役割を知らしめる良い機会であると考えている。

今までも他の学会と共催で色々行事をこなしてきたが、歴史を中心にして各分野の学問の根幹に触れる機会を見逃さずに医史学会員が首を突っ込み、またこれらの学会での成果を医史学会に持ち帰って頂きたい。

ところで、日本消化器病学会は一九九八年に創立一〇

〇年を迎える。これに合わせて記念行事が予定されており、その中に学会史の刊行も含まれ、演者も小委員長として関与している。

日本消化器病学会は、初めからこの名称を名乗ったわけではない。ドイツのヴェルツブルクから消化器病を学んで帰国した長与称吉が院長をしていた東京の胃腸病院の私的な研究会から発足して、はじめは胃腸病研究会と名乗っていた。第一回の総会は一八九九年であったために、そこから数えて学会誌には長いこと一八九九という年がロゴ・マークについていた。しかし、正確にはその前年一八九八年十二月十七日に創立集會が開かれていることから、一九九四年七月からは創立を示すロゴ・マークの数字を一八九八に変更することになった。これが一〇〇周年記念準備委員会の手懸けた最初の仕事であった。

創立から四年が経って、学会に昇格する時に日本消化器病学会と名乗った。「キ」には現代の「器」ではなく機械の「機」が使われていることも興味がある。この「機」が容器の「器」に代わる時に色々議論があり、学会の性

質に変化や分化が生ずるのである。現代は日本消化器病学会と名乗っているが、胃腸病研究会発足当時は「消化機」と「消化器」が混同して使われていた。

今回は、後の展開については触れず、創立当時の胃腸病研究会の雑誌から約一〇〇年前の医学界の事情を検討してみた。

「諸君！本日ハ胃腸病研究会ノ発会ヲ致シマスルニ付キマシテ、諸君ニ御通知ヲ申上ゲシ処、斯ク多数ノ御参集ヲ辱フシ、」に始まる会主長与称吉の発会趣旨講演は文語調ではあるが、当時の演説をそのまま収録してあり、それ自体興味ある文章である。もつと注目すべきは味わいのあるその内容である。すなわち、消化器の疾患は非常に多いこと、食生活の異なるわが国では西欧の消化器病学をそのまま受け入れるのはふさわしくないこと、消化器の病気は他の系統の病変の前駆症状や合併症としても深いつながりがあること、進歩した外科的な治療が消化器病治療と深く関わってきたことなどから、広く色々の分野の研究者や開業医に参加を呼び掛けているのである。まだこの時点では、内科学会も外科学会も発足して

おらず、大学の教室とは異なる私的な医療機関からこのような逞しい活動が始まったことに驚きを感じる。一五〇人程に呼び掛けたのに対して一九〇人が参加し、席がないために開会が一時遅れたなど当日の様子が研究会誌雑報に生き生きと描かれている。

演題はプログラムに載ってなかった金杉英五郎の「失題」を第一席に、山極勝三郎の「病理上胃及び他臓器トノ関係」、三浦謙之助の「胃病ノ沿革及び内科諸病トノ関係」、北里柴三郎の「消化器ニ於ケル伝染病ニ就イテ」、最後が長与称吉の「胃病患者ノ食餌ニ就イテ」など錚々たる顔触れで、会主以外は名誉会員として待遇されている。

場所は東京市麴町区富士見町の富士見軒であった。

（慶應義塾大学医史学研究室）